

「平成 30 年 4 月 1 日に思う」

本村の副村長が好む「温故知新」という言葉があります。この言葉から、あなたならどのようなことを想像しますか？

このほど、近畿府県正副町村会長研修会が滋賀県で開催されました。その中で、組織的な商法と「三方よし(売り手よし・買い手よし・世間よし)」の精神で刻苦精励こつくせいれいしたことで知られる「近江商人」、中でも「日野商人」について学ぶ機会をいただきました。

まさに「歴史に学ぶ」とはこのことでしょう。気が付けば熱心に耳をかたむける自分がいました。

実りの多い近江での一日でした。その一端をここでご紹介します。

彼らは行商の他に、出先の商人との共同出資による小型店舗経営を全国で行っていました。これは今でいうフランチャイズ展開方式の原型とも言えます。また、400人を超える会員を有した商人組合「日野大当番おおとうばん」を幕府の庇護ひごのもとで組織していました。個人の商売を組織が強力に支える商法を展開していたのです。他にも、街道に商人専用の「定宿」を設け、情報の交換やさまざまな便宜を図っていたこと。社会奉仕のすすめや偽装を悪とする「慎み10か条」を作成していたこと。さらには、仲間独自の定期飛脚便の制度があったこと等々。達人技とも称されるこれらの商法は、今からおおよそ400年前の江戸時代初期に実践されていたことです。その根幹には、社会に貢献してこそ良い商売であるとする「三方よし」の精神があり、多くの大企業の経営理念となっています。

商人と行政で立場は違えど、この社会奉仕の精神は大いに見習うべきものであります。あらためて「近江商人恐るべし！！」と感服しました。

「故ふるきを温たずねて新しきを知る」

近江商人の精神を学び、引き続き水源地の村づくりに取り組んでいきます。